

# 書かでもの記

永井荷風

青空文庫



身をせめて深く懺悔ざんげするといふにもあらず、唯臆おくめん面もなく身  
 の耻とすべきことどもみだりに書きしるして、或時は閱歴えつれきを語  
 ると号し、或時は思出をつづるなんぞと称とへて文を売り酒沽かふ道  
 に馴れしより、われ既にわが身の上の事としいへば、古き日記の  
 きれはしと共に、尺しゃくはち八 吹きける十六、七のむかしより、近く  
 は三味線けいこに築地つぎじへ通ひしことまでも、何のかのと齒の浮く  
 やうな小理窟つけて物になしたるほどなれば、今となりてはほと  
 ほと書くべきことも尽き果てたり。然るをなほも古き机の抽斗ひきだし

の底、雨漏る押入おしいれの片隅に、もしや歓場かんじょう二十年の夢の跡、  
あちらこちらと遊び歩きし茶屋小屋の勘定書、さてはいづれお目  
もじの上とかく売女ばいじよが無心の手紙もあらばと、反古ほごさへ見れば  
鵜うの目鷹の目。かくては紙屑かみくず拾ひろもおそれをなすべし。

つらつらここにわが売文の由来を顧み尋たずぬるにわれ始めて小説の  
単行本といふもの出せいしはわが友巴山人はさんじん赤木君の経営せし美育  
社なり。数ふれば早十七年のむかしとなりぬ。巴山人は早稲田出  
身の文士にて漣山人門下の秀才なりしが明治三十四年同門の黒田  
湖山こざんと相あいいはかり麴町こうとうじまち三番町さんばんちよう二七不動のほとりに居をかま  
へ文学書類の出版を企てき。その頃文学小説の出版としいへば殆  
ど春陽堂一手の専門にて作家は紅葉露伴こうようろはんの門下たるにあらずん

ば殆どその述作を公おおよけにするの道なかりしかば、義侠の巴山人奮然  
 意を決してまづわれら木曜会の氣勢を揚げしめんがために賢しを投  
 じ美育社なるものを興し月刊雑誌『饒舌じょうぜつ』を発行したり。  
 『饒舌』は寸鉄かへつて人を殺すに足るとして三十二頁の小冊子と  
 し、黒田湖山主筆となりて毎号巻頭に時事評論を執筆し生田葵山いくたきざん  
 とわれとは小説を掲げ西にしむらしよざん村渚山は泰西名著の翻訳を金子紫草かねこしそ  
 は海外文芸消息を井上唾々いのうえあは俳句と随筆とを出しぬ。これと共に  
 美育社は青年小説叢書と題してまづ生田葵山の小説『自由結婚』  
 次に余の拙著『野心』西村渚山の『小間使こまづかい』黒田湖山の『大学  
 攻撃』等を出版し、また星野麦人ほしのばくじんをして『古今俳句大観ここん』四卷  
 を編纂せしめき。翌年美育社ますます業務を拡張し神楽坂上かぐらざかうえてら

寺町通<sup>まちどおり</sup>に書籍雑誌の売捌店<sup>うりさばきてん</sup>をも出せしが突然社主赤木君故ありてその郷里に帰らざるべからざるに及び、惜しい哉事<sup>かな</sup>皆中絶するに至りぬ。雑誌『饒舌』は湖山一人<sup>いちにん</sup>の手に残りて『ハイカラ』と改題せられしが気焰また既往の如<sup>ごとく</sup>なる能<sup>あた</sup>はず幾何<sup>いくばく</sup>ならずして廃刊しき。

これより先生<sup>せんせい</sup>田葵山書肆<sup>しよし</sup>大学館と相知る。主人岩崎氏を説いて文学雑誌『活文壇<sup>かつぶんだん</sup>』を発行せしめ、井上唾々と共に編輯<sup>へんしゅう</sup>の<sup>つかさど</sup>ことを掌りぬ。『活文壇』は木曜会同<sup>どうじん</sup>人の作を発表するの傍汎<sup>かたわら</sup>く青年投書家の投書を歓迎して販売部数を多からしめんことを試みたり。然れども当時この種の投書雑誌には小島烏水子の『文庫』、田口掬汀<sup>たぐちきんてい</sup>氏の『新声』等<sup>とう</sup>その勢力甚盛<sup>はなはだ</sup>なるあり。新刊の

『活文壇』は再三上野三宜亭さんぎていに誌友懇談会を開き投書家を招待し木曜会の文士交こもんこも文芸の講演を試むる等甚勉つとむる処ありしが、書肆しよし早くも月々の損失に驚き文学を疎うとんじて赤本あかほんを迎へんとするに至つて『活文壇』は忽ち廃刊となりき。

ここに本町一丁目の金港堂きんこうどう明治三十五年の頃突然文学婦人少年等の諸雜誌ならび並に小説書類の出版を広告して世の耳目じもくを驚かせしことあり。金港堂といへば人に知られし教科書々類の版はんもと二元なり。この書肆の資金を以て文芸その他諸雜誌の発行に着手せんかこれまで独ひとりてんか天下の春陽堂博文館ともどもに顔色がんしよくなからんとわれ人共ひとに第一号の発刊を待ちかねたり。やがて現はれたるものを見れば文学雑誌はその名を『文芸界』と称し佐々醒さつさせいせつ雪せつを主筆

に平尾不孤草村北星斎藤弔花の諸子を編輯員とし巻首にはたしか広津柳浪泉鏡花らの新作を掲げたり。されどこれらの新作さして評壇の問題とならず雑誌はまた徒に尠大なるのみにて一貫せる主張といふものなく甚締りなしとの非難ありき。されば従来の『文芸倶楽部』と『新小説』、依然として一は通俗的に一は専門的なる本来の面目を把持して長く雑誌界に覇をとなへ得たり。

金港堂の『文芸界』は第一号の発刊と共に賞を懸けて長篇小説を募集しぬ。敢て選者の名を公にせざりしかど醒雪子以下同誌編輯の諸子なりしや明なり。余が『地獄の花』とよべるいかがはしき拙作はこの懸賞に応募したるもの。選に入ること能はざりしが

編輯諸子の認むる所となり単行本として出版せらるるの光榮を得たるなり。原稿料この時七十五円なりき。さてこの折選に入りしもの一等に米光閔よねみつ かんげつ月の『千石岩』せんごくいわ二等に齋藤溪舟さいとうけいしゅうの『殘菊』ざんぎく、田口掬汀の某作等ありしと記憶す。これらの作家皆功成り名遂げて早くも文壇を去りしに、思へばわれのみ唯一人今に浮身を衆毀しゅうきの巷ちまたにやつす。哀むに堪へたりといふべし。

懸賞小説といへばその以前より毎週『万朝報』よろずちようほうの募集せし短篇小説に余も二、三度味をしめたる事あり。選者は松居まついしやう松葉子しょうなりしともいひまた故人齋藤緑雨さいとうりよくうなりしといふものもありき。応募者には知名の大家折々小遣取りこづかいとにいたづらするもの多かりし由。当時懸賞小説さまざまありしが中なかに『万朝報』

の短篇最もすぐれたるを見ればかかる噂もまんぎらの根なしごとにはあらざりしが如し。

金港堂より単行本出せし後はどうやらかうやらわれも新進作家の列に数へ入れらるるやうになりぬ。たしか明治三十六年の春なりしと覚ゆ。新俳優伊井蓉峰いよいよほうこし まふみえ小島文衛いちむらぎの一座市村座ちかまつにて近松ねびきのかとまつが『寿門松』を一番目に鷗外先生の詩劇『両浦島』をなかもく中幕に紅葉山人が『夏小袖』を大喜利に据ゑたる事あり。またこの一座この度の興行にはわれらの知友たりし畠山古瓶はたけやまこへいといへる早稲田出身の文士、伊井の弟子となり初めて舞台へ出づべしといふに、いささか氣勢を添へんものと或日風葉葵山活東ふうようきざんかつとうの諸子と共に、おのれも市村座に赴きぬ。あたかも好しよその日は

よさのてつかん  
与謝野鉄幹子を中心とせる 明 みようじよう 星派の人々 『両浦島』を喝 かつさい 采

せんとて土間棧敷に集れるあり。幕いよいよ明かんとする時畠山

古瓶以前は髯むぢやの男なりしを綺麗に剃りて はおりはかま 羽織袴の様子よ

く幕外に出でうやうやしく伊井一座この度鵜外先生の新作狂言上 じ  
ようじようゆるし 場 の許を得たる光栄を述べき。一幕二場演じをはりてやがて

再び幕となりし時、わが傍 かたわら にありける某子突然わが袖をひき隣れ

る棧敷に葉巻くゆらせし髭ある人を指してあれこそ森先生なれ、

いで紹介すべしとて、わが驚きうろたへるをも構はずわれを引き

行きぬ。われ森先生の警咳 けいがい に接せしはこの時を以て始めとす。

先生はわれを顧 かえり み微笑して『地獄の花』はずでに読みたりと言は

れき。余文壇に出でしよりかくの如き歓喜と光栄に打たれたるこ

となし。いまだ電車なき世なりしかどその夜よわれは一人下谷したやより  
 お茶の水の流にそひて麴町までの道のりも遠しとは思はず樂しき  
 未来の夢さまさま心のうち中にうゑがきつつ歩みて家に帰りぬ。

かくて『文芸界』をはじめ『新小説』『文芸倶楽部』なぞに原  
 稿を持ち行きても三度に一度はしぶしながら買つてくれるやう  
 になりぬ。されど原稿は三月半年と買はれたるまま公おにおせられざ  
 れば、売名にのみ心あせるものの長たく堪たふべき所ならず。ここに  
 詩人蒲原かんばらありあけ有明子新声社の主人と相知れる由よしを聞き子を介して  
 新声社に赴おもむき『夢の女』と題せし一作三百枚ほど持てあましたる  
 ものをば原稿料は無用なればとて、ここに再び単行本一冊を出版  
 したり。新声社は即すなわちいまの新潮社が前名にて当時は神田錦町かんだにしきちよう

区役所の横手にささやかなる店をかまへるたり。この一書さして版元の損にもならざりしと見えつづいて『女優ナナ』の出版にこたびは原稿料三拾円を得たり。これ明治三十六年初夏のことにてその年の秋虫の声やうやく繁くなり行く頃われはふと亜米利加に渡りぬ。

わが売文のむかしがたりの中<sup>うち</sup>ここに書<sup>かき</sup>漏<sup>もら</sup>せしはやまと新聞社に雇はれ雑報とつづきもの書きて月々拾貳円を得しことなり。そは明治三十四年なりしと覚ゆ松下某といふ人やまと新聞社を買取り桜痴居士を主筆に迎へしよりその高弟榎<sup>え</sup>本<sup>もと</sup>破<sup>はり</sup>笠<sup>ゆう</sup>従つて入社しおのれもまた驥尾<sup>きび</sup>に附しけるなり。その時まで一年ほどわれは既に人にも語りし如く桜痴居士の門弟となり歌舞伎座にて拍子木

打ちてゐたりしが、今の歌右衛門福助より芝翫しかんに改名の折から小紋もんの羽織貫はおりひたるを名残りとして楽屋を去り新聞記者とはなりぬ。過ぎしことなれば身の耻語りついでに語り出せば楽屋通ひよりまたまた二、三年前のことなり。われ講釈と落語に新しき演劇風の朗読を交へ人にんじょう情ばなし咄ばなしに一新機軸いだを出さんとの野心を抱き、その頃朝寝坊むらくと名乗りし三遊派の落語家の弟子となりし事もあり。当今都下の席亭にむらくと看板かかぐるものはその頃の人とは同じからずといふ。

余のやまと新聞社いに入りし時三面雜報欄を受持さいぎくたるは採菊さいぎく山さんじん人おかもとと岡本綺堂きどう子こなりき。採菊山人は即山すなわち々さん亭さん有さん人いありんどにして仮名垣魯文かながきろぶんの歿後われら後学の徒をして明治の世に江戸戯

作者の風貌を窺うかがい知しらしめしもの実にこの翁いちにん一人ありしのみ。

さればわれ日にちにち々編輯局に机を連ねて親しくこの翁の教を受け得

たる事今にして思へばまことに涙こぼるる次第なり。岡本綺堂子

はその頃しきり頻しきりにユーゴー、ヂユマなどの伝奇小説を読まれりたり。

子は半蔵門外に居を構へおのれは一番町なる父の家いえに住みければ

新聞社の帰途堀端を共に語りつつ歩みたる事度々なりき。子はそ

の頃はなはだより甚かげん謹かげん嚴寡言の人なりき。

ひびや 日比谷には公園いまだ成らず銀座通ぎんざどおりには鉄道馬車の往復ゆききせし

頃おわりちよう尾張町よつかどの四角今ライオン珈琲店コーヒーてんある辺あたりには朝野新聞中

央新聞毎日新聞なぞありけり。やまと新聞社は銀座一丁目の横町

いま見る建物なりしかば、表通岩谷天狗いわやてんぐの煙草店に雇われたる妙

齡おんなてんいんの女店員いいつもこの横町に集りて緋ひの蹴けだ出しあらはにして  
 頻しきりに自転車の稽古するさま折々目の保養となりしも既に過ぎし世  
 のこととぞなりぬる。女の自転車と馬乗りとはその頃の流行なり  
 しにやよしわらしながわろう吉原かかえ品川わぐら楼の抱が和鞍ゆさんに乗りての遊山しんぼしげいしまた新橋芸  
 者やが自転車つらねて花見に出かけし噂なぞかしましき事ありけ  
 り。

さてわが新聞記者たりしもわづか半はんとし年ばかり社員淘汰のため  
 とやらにて突然解雇の知らせを得たり。わが記者たりし時世に起  
 りし事件にていまに記憶するは星ほしとおる亨せつかくの刺客せつかくに害せられし事  
 と清きよもと元ようお葉の失せたりし事との二つのみ。新聞記者をやめたる  
 後は再びもとの如く歌舞伎座の楽屋に入いらん事をこいねが冀ねがひしかど敬し

て遠とけらるるが如くなりしかばここに意を決し志を改めて仏蘭西フランス語稽古にと 暁ぎようせい 星 学校の夜学に通ひ始めぬ。巴山湖山両子の美育社を興せしはあたかもこの年の秋なれば話の順序ここにて初めに立戻るものと知るべし。

『あめりか物語』は明治四十年 紐ニユウ 育ウウク より仏蘭西に渡りし年の

冬里昂市ヴアンドオム町リオン まちのいぶせき下宿屋にて草稿をとりまとめ

序文並に挿絵にすべき絵葉書をも取揃へ市立美術館の此方こなたなる郵

便局より書留小包にして小波さざなみ先生のもとに送り出版のことを依

頼したるなり。この稿料いかほどなりしか記憶せず。翌よくねん年秋帰

国せし時『あめりか物語』は既に市いちに出でるたりき。われは直ただちに

仏蘭西滞在中及び帰航の船中にもものせし草稿を訂正し『ふらんす

物語』と名づけ前著出版の関係よりして請はるるままに再び博文館より出版せしめしが忽ち発売禁止の厄やくに会ひてこれより出版書肆との談判はなはだ甚面倒になりけり。わが方かたにては最初出版契約の際受取りたる原稿料金百弍拾五円を返済すべしと申送りしを博文館にてはそれだけにてはこの損失はつぐなひがたし出版契約書の第何条とやらに原稿につきて不都合のことあり発行者に迷惑およぼを及したる時は著作者はその責任を負ふべき旨むね明記しあれば既に御承知のはずなりと手強てごわく申出で容易に譲らざる模様なればわれはこの喧嘩相手甚よろしからずと思ひそのまま打捨て如何様いかように申もう来しきたるも一切返事せざりき。わが家やの玄関には毎日のやうに無性髯ぶしようひげすらぬ洋服の男来りて高こう声せいに面会を求めさうさう留守をつかふな

らばやむをえぬ故法律問題にするなどと持前のおどし文句をな  
 らべて帰るなぞ言語道断の振舞度々なりき。博文館編輯局には  
 その折木曜会の知友多かりき。小波先生は即編輯総長の椅子にあ  
 り。『太陽』には浅田空花子『中学世界』には西村渚山人  
 『文芸倶楽部』には思案外史石橋氏各その主筆なりき。これら  
 の人々と会合せし折博文館の文士に対する甚礼なき事を語りしに、  
 出版課に雇はれるものは皆かくの如し物のわかるものは一人も  
 なければ打ちすて置きて心に留めたまはぬがよしといふ。かくて  
 『ふらんす物語』損害賠償の談判は八年に渡りて落着せず大正五  
 年<sup>もみやま</sup> 山書店『荷風傑作鈔』なるものを出版し該書の一部を採  
 録するに至り重ねて懸合面倒とはなりけり。かの薄気味わるき

博文館使用人は再び頻々ひんびんとしてわが玄関に來りて文句をならぶ。不愉快いふばかりもなし。さすがの余も遂に讓歩してここに旧著に類似したる『新ふらんす物語』なるものの編纂と出版発売を默許しその代りとして旧著の版權を著者の方へ取り戻すこととなしぬ。されば過般博文館より発売せし『新ふらんす物語』なるものの芸術並に文学上の責任に至つては毫も原著者の与りあずか知る所にあらず。かの一書は實に原著者の意志に反して出版せられたるものなりかし。この事ありてより余は書肆しよしを恐れ憎むこと蛇蝎だかつの如くなりぬ。今の世士農工商の階級既に存せずといへども利のために人の道を顧みざる商賈しょうごの輩やからは全く人の最下に位せしめて然るべきなり。

毎朝勝手口に御用ききに來る出入商人始めはいかにも正直らしく見せ掛け次第々々に品物を落して不正の利を貪るむさぼを常とす、米屋酒屋薪屋皆然らざるはなし。書肆の月刊雑誌を發行するや最初は何事も唯々いいだくだく諾々主筆のいふ処に従ふといへども号を追ふに従つてあたかも女房の小うるさく物をねだるが如く機を見折を窺ひ倦うまず撓たゆまず内容を俗にして利を得ん事のみ図る。理想は文士の生命にして利は商人の生命よりも首よりも更に大事とする所なり。両者到底水火相容るるものにあらざるはけだしやむをえざるなり。

わが著書のその筋より発売を禁止せられしもの『ふらんす物語』について『歡樂』と題せし短篇集あり。後にまた『夏姿』といふ

ものあり。『歡樂』の一篇は初め『新小説』に掲載せし折には何事もなかりし故その頃飯田町六丁目いいたまちに店を持ちたる易風社えいきふうしゃの主人に請こはるるままその他の小篇と合せて一卷となし出版せしめたるに忽ち発売禁止となりぬ。易風社はその以前謝礼として壹百円を贈り来りしが発売禁止となるも博文館の如く無法なる談判をなさざる故わが方じゆうじゆうにても重々じゆうじゆう気の毒になりいそぎ『荷風集』一卷の原稿をつぐなひとして送りけり。この著幸さいわいにして版を重ねき。易風社店を閉ぢし時靱山書店『歡樂』の紙型を買取り店員某の名儀を以て再びこれおとがを出版す。然る処この度は何の御咎おとがめもなく今に至つてなほ販売せりといふ。

『夏すがた』の一作は『三田文学』大正四年正月号に掲載せんと

て書きたるものなりしが稿成るの後自ら読み返し見るにところどころいかがにやと首をひねるべき箇所あるによりそのまま発表する事を中止したりしを靱山書店これを聞知り是非にも小本こほんに仕立てて出版したしと再三店員を差遣されたればわれもその当時は甚はなはだ昵懇じっこんの間柄むげにもその請こいを退しりぞけかね草稿を渡しけり。然れどもその折出版届にわが名は出だすまじ万一の事ありても当方にては一切責任を負はざればその辺よくよく御承知あれと念に念を押してやりけり。果せるかなこの小冊子発売禁止となりしのみか、靱山書店はその筋へ始末書を取られ厳しきお叱を蒙りけり。靱山書店今に折々人に語りて永井さんのおかげでは度々ひどい目に逢ひますと。かくては罪まつたく作者にあるが如し。

寛政のむかし さんとうあんきようでん 山東庵京伝 しやれほん 洒落本をかきて てぐさり 手鎖はめられしは、板元 はんもと 葛屋重三郎 つたやじゆうざぶろう お触 ふれ にかまはず利を得んとて京伝にすすめて筆を執らしめしがためなりといひ伝ふ。とかくに作者あまり板元と懇意になるは間違のもとなり。

『伊波伝毛乃記』 いわでものき といふものあり。これ きよくていばきんあん 曲亭馬琴 そし 暗に人を誹りて己れ おの を高う たこ せんがために書きたるものなりとか。おのれがこの『嘉加伝毛乃記』 かかでものき いささか名は似たれどもゆめゆめさる不都合の下心あるにあらず。書かでもよきこと書くは唯いつもの筆くせとしかいふ。

このごろ雑誌『新潮』の記者見るにも足らぬわが著作を採りこ  
もといれを基として余が文学年表なるものを編輯し該誌がいしじょう上に掲載すべ  
 ければとて過ぎし日のことどもさまざま問合せ来りぬ。これによ  
 りて日頃は全く忘れ果てたりし事どもここに再び思浮ぶる節々多  
 くなりぬ。

そもわが文士としての生涯は明治三十一年わが二十歳の秋、  
すだれ

『簾の月』と題せし未定の草稿一篇を携へ、  
ひろつりゆうろう牛込うしごめ矢来町やらいちようなる  
 広津柳浪先生の門を叩きし日より始まりしものといふべし。

われその頃外国語学校支那語科の第二年生たりしが一ツ橋ひとばしなる校  
おもむ舎に赴く日とては罕まれにして毎日飽かず諸処方々の芝居寄席よせを見歩

きたまさか家いえにあれば小説俳句漢詩狂歌たわむれの戯たわむれに耽り両親の嘆きも物の数とはせざりけり。かくて作る所の小説四、五篇にも及ぶほどに専門の小説家につきて教を乞ひたき念よ漸うく押おへがたくなりければ遂なに何なんびと人の紹介をも俟またず一日突然いちにち広津先生の寓居ぐうきよを尋ねその門生たらん事を請ひぬ。先生が矢来町にありし事を知りしは予あらかじめ電話にて春陽堂に聞合せたるによつてなり。

余はその頃最も熱心なる柳浪先生の崇拜者なりき。『今戸いまどしんじ心中ゆうちゆう』、『黒蜥蜴くろとかげ』、『河内屋かわちや』、『亀さんかめさん』等の諸作は余の愛読して措おく能あたはざりしものにして余は当時紅葉眉山露伴こうようびざんろはん諸家の雅俗文よりも遙に柳浪先生が對話体の小説を好みしなり。

先生が寓居は矢来町の何番地なりしや今記憶せざれど神楽坂かぐらざか

を上りて てらまちどおり 寺町通をまつすぐに行く事 すうちょう 数町にして左へ曲り  
 たる細き よこちよう 横町の右側、格子戸造の平家にてたしか もんがまえ 門構  
 はなかりしと覚えたり。されど庭ひろびろとして樹木 すくな 尠からず手  
ようずばち 水鉢の鉢前には梅の古木の形面白く わだかま 蟠りたるさへありき。格子  
 戸あけて上れば三畳つづいて六畳（ここに後日門人 はせがわとうがい 長谷川濤涯  
 机を置きぬ。）それより四枚 まいだて 立の襖を境にして八畳か十畳らし  
 き奥の一間こそ客間を兼ねたる先生の書齋なりけれ。床の間 とこ には  
 遊女の たちすがた 立姿かきし墨絵の一幅 いっぷく いつ見ても掛けかへられし事  
 なく、その前に据ゑたる机は いっかんぱり 一閑張の極めて粗末なるものにて、  
 先生はこの机にも床の間にも書籍といふものは一冊も置き給はず  
 唯六畳の間 ま との境の襖に添ひて古びたる書棚を置き麻糸にてしば

りたる古雑誌やうのものを乱雑に積みのせたるのみ。これによりて見るも先生の平生へいぜい生物せいぶつに頓とんじやく着やくせず襟きんかい懷かい常に洒しやしやく々らく落らくたりしを知るに足るべし。

初めて余のおそろるおそろる格子戸明あけて案内を乞ひし時やや暫くにして出きたで来られしは鼻下に髭ひげを蓄たくわへし四十年配まなこの眼大きく色浅黒き人なりき。その様子その年配正しくこの家やの主人あるじらしく見ゆるにぞ、この人こそわが崇拜する『今戸心中』の作者なるべけれど思にわかへば、俄にわかにをのく胸押静め、漸くに名刺差出し突然ながら先生にお目にかかりたき由いいい言出でしに髭ある先生らしき人は訳もなく主人あるじは唯今不在なれば帰宅次第その趣おもむき申伝ふべしといはるるに我は是非なくさらば明朝また御邪魔にお伺ひ致すべしとそのまま

ま格子戸を立去りしが、どうも今の人が柳浪先生らしき気がして  
 ならぬ故そつと建仁寺垣けんになしがきの破れ目やより庭越しに内の様子を窺へ  
 ば、残暑なほ去りやらぬ九月の夕暮とて障子しょうじ皆明あけ放ちし座敷  
 の縁先えんさき、かの髭ある人は煙草盆引寄せ悠々ゆうゆうとして煙草のみつ  
 つ夕風さそふ庭打眺めつ。さてはわが想像にたがはざりけり。何な  
 人んびとの紹介状をも持参せず突然たづね行きける故主人自ら立出で  
 しまま不在といひて謝絶せしなるべし。かくてはわが熱心の先生  
 に通ぜん日まで幾度いくたびとなく尋ね行くより外に道なしと翌日の夕  
 暮再び案内を乞ひしにこの度は女中らしき媼取次おうなに出でて直ただちに此  
 方なたへと奥の間に通されぬ。見れば床の間の前なる一閑張の机に物  
 書きある人あり筆を擱おきて此方むきなに向直らるるに、昨日取次きのうに立

出でられし人に瓜二つともいふべきほどよく似たれども、近く対座して重ねてよくよく見れば年も少しく若く身体からだつきもまたすこし瘦せたる別人なり。後日に至りて先生の話に聞けば取次に出でし人は先生の令れいけい兄にいにて日頃地方を旅行せらるる肖像画家なりとの事なりき。

さてその夕ゆうわわれは是非にも門人となりたき由懇願せしに先生なかなか承知したまはず、小説家なぞにならんと思立つは大だいなる心得違なり、君今学業を放ほう擲てきしてかかる邪道に踏み迷はば他日必ず後悔ほご臍そでをかむ事あらん文筆を好まば唯正業の余暇これをなして可なりかつはまたわれは尾崎や川上とは異なりてかの人々の如く多く門生を養ひ教ふるの煩はんに堪たへざるものなり、今までも度々人

に頼み込まれし事あれど皆ことわりぬ。されば到底貴下の満足する如く丁寧かなに教ふる事は叶かなひがたかるべし。もしそれにてもよければやむをえざる故唯折々いとま暇あらん時遊きたびに來られよ。我もまたいそがしからずば君が草稿の字句かなづかい仮名遣の誤ぐらゐは正すことを得べしといはれけり。わがよろこび誠に筆紙のつくすべき処ならず幾重いくえにもよろしくとてその日は携へ來りし草稿『簾すだれの月』一篇を差置きもぢもぢして歸りけり。

柳浪先生の繡眼めじろ児を飼ひて樂しみとせられしはあたかも余の始めて先生を見たりしその頃より始まりしなり。最初『簾すだれの月』一篇を置きて歸りし折には胸のみとどろきし故にや小鳥の籠うむの有無には更に心もつかざりしが、その後重ねて教を乞ひにと行く度々

鳥籠は一ツ二ツと増え<sup>ふ</sup>来り<sup>きた</sup>てその年の冬には六畳の間の片隅一間の壁に添ひて繡眼児の籠はさながら鳥屋の店の如く積重ねらるる事二、三段にも及びやがて鶯の籠さへかの墨絵の遊女が一幅かけたる薄暗き床の間に二ツまで据ゑ置かれぬ。先生がその内<sup>ない</sup>相<sup>しよう</sup>を失はれたるはこの前年なりしといふ。されば守るにその人なき家の内何となく物淋しく先生独り令息俊郎和郎の両君と静に小鳥を飼ひて<sup>たの</sup>娛<sup>し</sup>みとせられしさまいかにも文学者らしく見えて一<sup>ひと</sup>際<sup>ときわ</sup>われをして景<sup>けい</sup>仰<sup>こう</sup>の念を深からしめしなり。それより後明治三十六年に及びてわれ<sup>ア</sup>亜<sup>メ</sup>米<sup>リ</sup>利<sup>カ</sup>加に渡らんとするの時<sup>いとま</sup>暇<sup>ぎ</sup>乞<sup>ひ</sup>ひに赴きし折には先生は<sup>あざふり</sup>麻布龍土町<sup>ゆうどちよう</sup>に居<sup>きよ</sup>を移され既に二度目の夫人を迎へられたりき。

先生が矢来町の閑居には小鳥と共に門人もまた加はり来りぬ。

最初に長谷川濤涯君次に中<sup>なかむらしゆん</sup>村<sup>むら</sup>春<sup>はる</sup>雨<sup>あめ</sup>君また女流の作家にてその

名失念したれど妙齡の人代る代るかの六疊の間に机を据ゑたり。

余は一番<sup>いちばんちよう</sup>町なる父の家より一週に一、二度は欠かさず草稿を

携へて通ふ中やや読むに足るべきもの二、三篇先生の添<sup>てん</sup>刪<sup>せん</sup>を経

たる後博文館または春陽堂の編輯局に送られき。これと共にわれ

はまた川上眉山、小栗風葉、徳田秋声等の諸先輩折々矢来の閑居

に来<sup>きた</sup>るを見ておのづから辱<sup>じよくゆう</sup>友となることを得るに至れり。か

くて明治三十二年七月わが小説『薄<sup>うす</sup>衣<sup>ころも</sup>』と題せし一篇柳浪先

生合作の名義にて初めて『文芸倶楽部』の誌上に掲げられたり。

当時文壇に勢力ある雑誌はいづれも新作家が作を掲ぐる事を好ま

ざりしよりかくは先生の許を得てその名を借用せしなり。この年朝日新聞記者栗島狭衣君牛込下宮比町の寓居に俳人谷たにかつとう活東子と携けいてい提して文学雑誌『伽羅文庫』なるものを発行せんとするや矢来に來りて先生の新作を請へり。時に先生筆硯ひつけなはだ甚多忙なりしがため余に題材を口授こうじゆし俄に短篇一章を作らしむ。この作『夕蟬』と題せられ再合作の署名にて同誌第一号に掲げられぬ。『伽羅文庫』は二号を出すに及ばずして廃刊しき。

その頃わが一番町の書齋に大山吾童とよぶ人しばしば遊びに來りぬ。当時尺八の名人荒木竹翁あらかきちくおうの門人にて吾童といふはその芸名なり。余もまた久しく浅草代地あさくさだいちなる竹翁の家また神田美かんだみとし土代町ろちようなる福城可童ふくしろかどうのもとに通ひたる事あり度々『鹿の遠音』しかとおね

『月の曲』など吹合せしよりいつとなく懇意になりしなり。この人生れてより下<sup>しもにばんちよう</sup>二番町に住み巖谷<sup>いわやさぎなみ</sup>小波先生の門人とは近隣の誼<sup>よしみ</sup>にて自然と相識<sup>あいし</sup>れるが中<sup>うち</sup>にも取りわけ羅臥雲<sup>らがうん</sup>とて清人<sup>しんじん</sup>にて日本の文章俳句をよくするものと親しかりければ互に往来する中われもまた羅君と語<sup>まじえ</sup>を交るやうになりぬ。羅氏俳号を蘇山人<sup>そさんじん</sup>と称す。大清<sup>だいしん</sup>公使館通訳官浙江<sup>せつこう</sup>の人羅庚齡<sup>らこうれい</sup>の長子なり。この人或日の夕元園<sup>もとぞのちよう</sup>町なる小波先生の邸宅に文学研究会あり木曜日の夜湖山葵山南<sup>こぞんききざん</sup>岳新兵衛<sup>なんがくしんべえ</sup>なんぞ呼ぶ門人多く相集まれば君も行き見て見ずやとてわれを伴ひ行きぬ。これ余の始めて木曜会<sup>おもむ</sup>に赴きしいはれなり。木曜会の事はここにいはずとも既にその主人が手記せるもの『駒<sup>こま</sup>のいななき』といふ書の中に掲げられたれば就

きて看るこそよけれ。

三

乙羽庵主人大橋氏逝きて後『文芸倶楽部』の主筆に三宅青軒といふ小説家ありけり。日頃人に向ひて『文芸倶楽部』はわれを戴きて主筆とせしより忽発行部数三、四万を越るに至れりと誇顔に語るを常としき。また人の文学を談ずる事あれば当今小説家と称するもの枚挙に違あらざれど真に文章をよくするものに至つてはもし向島の露伴子を措きなば恐らくは我右に出るものあらざるべしと傍若無人しきりに豪語を放ちて自ら高うせし

かば新進氣鋭の作家一人として青軒を憎まぬものはなかりけり。  
 されど『文芸俱樂部』によりてその作を發表せんには是非にも主  
 筆の知遇を待たざるべからずとて怒を忍び辞を低うして虎の門外そと  
 なるその家を訪ふものも尠すくなからず。一日おのれも菓子折いちにちに生  
 田くたぎざん葵山君の紹介状を添へ井上唾々子いのうえあと打連れ立ちて行きぬ。日  
 頃噂に聞く大家の事なれば最初はまづ門前払なるべしと内々覚悟  
 せしにわけもなく二階の書齋に通され君らは巖谷の門生なりとか。  
 これまでに何か書きたる事ありやと話は容易たやすく先方より切出され  
 ぬ。唾々子はその頃頻しきりに斎藤緑雨が文をよろこび雅号を破やれがきはな垣垣  
 花守もりと称ししばしば緑雨が『おぼえ帳』に似たるものを作りゐ  
 たり。この夜も一文を懐中にせしままおそるおそる取出とりいだして閲

覽を請ひけるに青軒子仔細らしく打見て墨を濃く摺り書体を叮ていね  
 嚀いに書かるるは若き人に似ず感心なりとそれよりそろそろ世の  
 新進作家なるものの生意気なる事をさまざま口ぎたなく痛罵した  
 る後君たち文章を書かんと思はば何はさて置き漢文をよく読み給  
 ふべしそれも韓かん柳りゅうの文のみにて足れりといふにあらざえんし  
 説たぐいの類殊たぐいに必要なり。されば支那小説の事に関してはわれもまた  
 露伴子と共に決して人後に落つるものならずと言ふ。唾々子はか  
 つて文学博士島田しまだ篁村翁の家塾こうそんにあり漢学の素養浅からざるの  
 人。おのれもまたいはゆる門前の小僧習はざれども父より聞きかじ  
 りたる事なきにあらざりしかば問はるるがままに聊いささか答こたふる処あ  
 りしにぞ大おおに青軒翁の信用を博おほしその夜携よへ行きける我が原稿は

唾々子のものと共に即座に『文芸倶楽部』誌上に掲載の快諾を得たりき。

この青軒先生こそはやがてわれをば桜痴居士福地先生に紹介の勞を取られし人にてありけれ。されどこの度の訪問は初めて硯友社の諸先輩を歴訪せし時とは異りて容易に望を遂ぐる事能はざりけり。福地先生の邸はその時合引橋手前木挽町の河岸通にて五世音羽屋宅の並びにてありき。一番町のわが家よりかしこまでは電車なければかなりの遠路なりしを歩み歩みて朝八時頃われは先生が外出したまはざる前をと思ひて三、四度、また夕刻帰邸の時分をはかりて五、六回、先づ青軒翁が紹介状を呈出し面談の榮を得ん事を請願せしが、或時は不在或時は多忙或時は不

例れい或時は来客中とばかりにて遂に望の叶ふべき模様もなかりけり。さすがの我も聊いささか疲労しかつはまたこの上強しひんには礼を失するに至らん事を虞おそれせめてわが芝居道熱心の微びちゆう衷をだに開陳し置かばまた何かの折宿望を達するよすがにもなるべしと長々しき論文一篇を草しそつと玄関の敷台に差置きて立ち去りぬ。やがて半月あまりを経たりしに突然福地家の執事えのもと榎本破笠子より予かねて先生への御用談一応小生より承り置うけたまわべしとの事につき御来車ありたしとの書面に接し即刻番地を目当に同じく木挽町の河岸通なる破笠子が寓居に赴きぬ。これ明治三十三年わが二十二歳の夏なりき。

さて破笠子はおのれが歌舞伎座作者部屋に入り芝居道実地の修

業とくしたき心底篤とくと聞取りし後とも俱ともに出でて福地家に至り勝手口より  
 上りてやや暫くわれをば一ひと間に控まへさせけるがやがてこなたへと  
 て先生の書齋と覺しき座敷へ導きぬ。川風涼しき夏の夕暮は燈火とうか  
 正に点ぜられし時なり。福地先生は風呂より上りし所と見えて平ひ  
らそでちゆうがたぼたん袖中形牡丹ゆかたの浴衣に縮ちりめん緬へこおびの兵児帯を前まへにて結び大だいなる革蒲  
 団おもむろの上に座し徐ゆるに銀のべの煙管キセルにて煙草のみてをられけり。破笠  
うやうや子は恭しく手をつき敷居しきいぎわ際よりやや進みたる処に座を占めけれ  
 ば伴はれしわれはまた一段下りて僅に膝を敷居の上に置き得しの  
みみ。破笠子の口添を待ちわれは今こん夕せき図はからず拝顔の望を達し面めん  
く目くこの上なき旨申述ぶる中にも万ま一先生よりわが学歴がくれきその他の  
 事につきて親しく問はるることあらば何と答へんかなぞ宛さなら警察

署へ鑑札受けに行きし芸者の如く独り胸のみ痛めけるが、先生は更にわが方かたには見向きもしたまはず破笠子を相手に今こんちよう朝パリイ巴里かわかみの川上壮士役者音二郎が事なりより新聞を郵送し来れりとして巴里劇界の消息を語かたり出されぬ。かくて三十分ばかりにて我は再び破笠子に伴はれ福地家を辞して帰りしがそれより三、四日にして歌舞伎座盆興行の稽古となるやわれはここに榎本氏請人うけにんにて歌舞伎座へ証文を入れいよいよ梨園りえんの人とぞなりける。証書の文も言左んごんの如し。

一 私儀わたくしぎ 狂言作者志望につき福地先生門生もんせいと相成貴あいなりき  
 座楽屋へ出入被差許候上者 劇道の秘事楽屋一切の密事ざ  
 決けつ而して口外致間敷候依而後日のため 一札如件いっさつくだんのごとし

歌舞伎座稽古は後々のちのちまで三階運動場を使用するが例なり。稽

古にかかる前破笠子より葉書にて作者部屋のものを呼集め手分てわけな

して書拔かきぬきをかく。当日われは破笠子より作者の面々に引合され

つづいて翌日本ほんよみ読にと先生出勤の折には親しく皆のものへよろ

しく頼むとの一言いちごんこれまことに御前ごぜんの御声掛りにして作者の面

々おのずか自らわれをば格別の客分たらしめんとするにぞわれは破笠子に

計りて客分の待遇は小生の願ふ所にあらず且那芸はかへつて甚はなはだし

き耻辱なれば何卒なにとぞ楽屋古来の慣例に従ひ寸毫の遠慮なく使役せ

られん事を請こうて止まざりしかば破笠子さればとて重ねて先生へ

申上げわれをば竹柴たけしばしちぞう七造といふ作者の預弟子あずけでしとなしこの人

より楽屋万端の心得拍子木ひょうしぎの入れ方など見習ふ事となしぬ。時

に歌舞伎座作者部屋には榎本氏を除きて四人の作者あり。竹柴七造たけしばせいきち、清吉きよきちは黙阿弥翁もくあみの直弟子じきでしにて一は成田屋付つぎ一は音羽屋付ねはの狂言方きょうげんかたとて重おもに団菊だんきく両優の狂言幕まくあき明幕まくぎれ切きの木を受持つなり。他に竹柴賢たけしばけんじ二浜真砂助はままさすけといふ作者ありき。賢二といへるは寺内河竹新七じないかわたけしんしちの弟子なればなほ血氣盛けつきざかりの年頃なりしが真砂助は先代瀬川如臯せがわじよこうの弟子とやらよほどの高齢なるに寒中も帽子かぶを冠かぶらず尻端折しりはしよりにて向脛むこうずねを出し半合羽はんがっぱ日和下駄ひよりげたにて浅草山あさくさやまの宿しゆくへん辺すまいの住居より木挽町楽屋へ通ひ衣裳かつだい鬘いしよ大

小うの道具帳どうぐぢょうを書きまた番附表看板等ばんぶちえんかんばんらうの下絵したえを綺麗きれいに書く。この老人らうじん猿若町三座表飾さるわかまちさんざおもてかざりの事ことなぞ委くわしく知りしりたり。

さてわが始めて劇部の人となり親しく稽古けいこを見たりし盆興行ぼんきやうは

団菊両優は休みにて 秀調しゅうちよう 染五郎そめごろう 家橘栄三郎かきつえいざぶろう 松助まつすけ ら一座

にて一番目は染五郎の『景清』かげきよ 中幕なかまくは福地先生新作長唄所しよさき

作事ごと『女弁慶』おんなべんけい (秀調の出物だしもの) 二番目家橘栄三郎松助の

げんやだなおおぎり

「玄治店大喜利」家橘栄三郎の『女鳴神』おんななるかみ 常磐津林ときわづりんちゆう 中出

がた語りなりき。作者見習としてのわが役目は木の稽古にと幕ごとに

にちよう

二丁を入れマハリとシヤギリの留とめを打つ事幕明幕切の時間を日

記に書入れ、楽屋中へ不時の通達なすべき事件ある折には役者の

部屋々々大道具小道具方衣裳床山とこやまはやかたとう 離子方等 楽屋中漏れなく触

れ歩く事等なり。着到ちやくとうの太鼓打込みてより一日の興行済むま

では厳冬も羽織を着ず部屋にても巻まき 蓑たばこを遠慮し作者部屋へ座ざ

もと

元もしくは来客の方々見ゆれば叮嚀に茶を汲みて出しその草履ぞうりを

揃へまた立作者たてさくしや出頭しゅつとうの折はその羽織をたたみ食事の給仕を

なし始終つき添ひ働くなり。わがしばしば草履をそろへ茶を汲み  
て出せし楽屋のお客様には大槻おおつき如電じよでん永井素岳ながいそかくなどありけり。

九月となりてわれはここに初めて団菊だんきく両優りやうゆうの素顔すがおとその稽古と

を見得たり。狂言はたしか『水戸黄門記』通しにて中幕「大徳だいたく

寺」焼香場しょうこうばなりしと記憶す。団十郎はその年春興行の折病に

罹り一時は危篤の噂さへありしほどなればこの度菊五郎との顔かおあ

合あ大芝居おおしばいといふにぞ景気は蓋ふたを明けぬ中より素破すばらしきもの

なりけり。つづいて十一月には一番目『太功記』馬盥ばだらより本

能寺のうじ討入までだんしゅう団洲だんしゅうの光秀みつひで菊五郎きくごらう春永はるながなり中幕ちゆうまく団洲だんしゅうの法ほ

眼うげんにて「菊畑きくばたけ」。菊五郎の虎蔵とらぞう福助ふくすけの息女を相手にし

ての仕草六十余の老人とは思へぬほど若々しく水もたれさうな塩  
 梅さすがに古今の名優と楽屋中にも人々驚嘆せざるはなかり  
 けり。二番目は菊五郎の「紙治」これは丸本の「紙治」を舞台  
 に演ずるやう河竹新七のその時新に書卸せしものにて一幕  
 目小春髪すきの場にて伊十郎一中節の小春をそのまま長  
 唄にしての独吟あり廻つて河庄茶屋場となる二幕目は竹本  
 連中出語にてわれら聞馴れし炬燵の場引返して天満橋太兵  
 衛殺の場となる。当時の劇界いまだ鴈治郎を知らず「紙治」  
 はいと珍しきものなりしが如し。菊五郎と鴈治郎とはもとより雲  
 泥の相違あるものなれば並べていひ出るは誤りなれども近頃鴈  
 治郎を見馴れし目より当年の菊五郎を思へば幕明きし時定木を

枕うしろむに後向きに横はりし音羽屋おとわやの姿は実に何ともいへたものには

あらず小春が手を取りよろよろと駆け出で花道はなみちいつもの処にて

本釣ほんつりを打ち込み後手うしろでに角帯かくおび引締め向むこうを見込むあたり全く二

度とは見られぬものなりけり。この狂言書かきおろし卸おろしの事とて稽古に

念を入れし事到底今人こんじんの思ひも及ばぬ処なるべし。書拔よみあの読

合わせ濟せいみし日音羽屋は茶屋さんしゅうや三州屋二階に竹本たけもと相生あいおい太夫たゆうを招

き置きて「紙治」一段を語らせこれを登場俳優一同に傾聴せしめ、

なほ浄瑠璃すみし後のちは親しく役々やくやく言葉の語りやうをば太夫へ質

問するなぞ苦心のほど察するに余あまりあり。初日を出せし後にも二、

三度合あいかた方を替へそれにもなほ落ちつかぬ模様なりけり。

芸談に耽らば限りなき事なれば筆をとどむ。歌舞伎座今は殆ほとんどそ

の外觀を変じたれど元より改築したるにあらねば楽屋の部屋々々  
 今なほかつてわが見たりし当時に異ならず。十年の後われ遠国<sup>えんごく</sup>  
 より帰来してたまたま知人をここに訪ふや当時の部屋々々空しく  
 存して当時の人なく当時の妙技当時の芸風また地を払つてなし正  
 に国亡びて山河永<sup>さんごうしえ</sup>にあるの嘆あらしめき。長々しく昔をのみ語る  
 の愚を笑ふ勿<sup>なか</sup>れ。当時楽屋口を入りて左すれば福助松助の室<sup>しつ</sup>あり  
 右すれば直<sup>すく</sup>に作者頭<sup>とうどり</sup>取部屋にして八百蔵の室これに隣りす。そ  
 れより小道具衣裳方あり廊下の端<sup>はずれ</sup>より離れて団洲<sup>だんしゅう</sup>の室に至る。  
 小庭<sup>こにわ</sup>をひかへて宛然<sup>さながら</sup>離家<sup>はなれや</sup>の体<sup>てい</sup>をなせり。表梯子<sup>おもてはしご</sup>を上れば猿<sup>さ</sup>  
 蔵<sup>るぞう</sup>染五郎二人の室<sup>ににん</sup>あり家橘栄三郎これに隣してまた鏡台を並ぶ。  
 それより床山を間にして間口<sup>まぐち</sup>甚<sup>ま</sup>ひろきものは即菊五郎の室<sup>すなわち</sup>にして

隣りは片岡市蔵かたおかいちぞうそれよりやがて裏梯子の降口おりぐちに秀調控へたりき。三階は相中大部屋あいちゆうおおべやなればいふに及ばざるべし。団八梅助頭取をつとめき。

## 四

秋暑しゅうしよの一日物いちにちかくことも苦しければ身のまはりの手箱用よ筆筒うだんすの抽斗ひきだしなんど取片付るに、ふと上田先生が書簡四、五通をさぐり得たり。先生逝ゆきて既に三年今年の忌日きじつもまた過ぎたり。駒光何ぞ駛はするが如きや。

おのれ始めて上田先生が辱じよくち知となるを得たりしは千九百八年

三月先生の巴里パリに滞留せられし時なり。これより先わが身なほ里昂オンの正金しょうきん銀行に勤務中一日公用にてソオン河上かじょうの客棧きやくさんに嘲風姉崎博士ちやうふうあねざきを訪ひし事ありしがその折上田先生の伊太利イタリ亜アより巴里パリに來きたられしことを聞知りぬ。わが胸はいまだその人を見ざるに先立ちて怪しくも轟きたり。何が故ぞや。そもそもその年としつき月わが身をして深く西欧の風景文物にあこがれしめしは、かの『即興詩人』『月草つきくさ』『かげ草くさ』の如き森先生が著書とまた『最近海外文芸論』の如き上田先生が著述との感化に外ならざればなり。わが身の始めてボオドレエルが詩集『悪の花』のいかなるものかを知りしは上田先生の『太陽』臨時増刊「十九世紀」といふものに物せられし近世仏蘭西文学史フランスによりてなりき。かくて

われはいかにかして仏蘭西語を学び仏蘭西の地を踏まんと心を起せしが、幸さいわいにして今やその望み半なかば既に達せられし折柄、あたかも好よし先生の巴里きたに来れるを耳にす。わが欣よろこび譬たとへんに物なし。やがてわれは里昂の銀行を辞職し巴里に入りて拉甸区ラテンクの一客きやくし舎やに投宿したり。然れども巴里にはもとより知る人ひとりもなかりしかば先生の旅館も知るによしなく紹介を求めんにもそのつてなかりき。われは初めて北米に遊あそびてよりこの年としつき月語るに友なき境涯に馴れ果て今は強しひて人を尋ねもとむる心もおのづからに薄らぎるたりしかば、唯ひとり巴里の巷ちまたの逍遙にうつらうつらと日を過すのみなりき。

ある夜よ元老院門前の大通なる左側  
コンセール小紅亭ルージュとよべる寄席よせ

に行きぬ。この寄席もまた巴里ならでは見られぬものの一なるべし。木戸銭安くなかうり中売のばば婆酒珈琲コーヒーなど売るさまモンマルトルの卑しき寄席にことな異らねど演芸は極めて高尚に極めて新しき管絃楽またはオペラの断片にて毎夜コンセルヴァトアルの若き楽師きた来つて演奏す。折々定じょうれん連の客に投票を請こひ新しき演題を定めあるひは作曲と演奏との批評を求むるなどこの小紅亭の高尚最新の音楽普及に力をつくす事一ひとかた方ならぬを察すべし。おのれドビュツシイ一派の新しき作曲大方漏すことなく聴き得たるはこの小紅亭の夕ゆうべなり。初て上田先生を見たるもまたこの小紅亭の夕ぞかし。

小紅亭の定連は多く拉甸区の書生画工にして時には落らくはく魄せる老詩人かとも思はるる白髪おきなの翁を見る。その夕中ゆうなか入も早や過ぎ

し頃ふとわれは聴衆の中にわが身と同じく黄いろき顔したる人あるを見しが、その人もまたわれを見て互に隔たりし席より訝しげに顔を見合せたり。然れども何人なるやを知らざれば言葉もかはさで去りぬ。これ即上田先生にして、その夕先生は英吉利西風の背広に髭もまた英国風に刈り鼻眼鏡をかけてゐたまひけり。

次の日われサンジェルマンの四ツ角なる珈琲店パンテオンにて手紙書きてゐたりしに、向側なる卓子に二人の同胞あり。相見れば一人はわが身かつて外国語学校支那語科にありし頃見知りたりし仏語科の滝村立太郎君、また他の一人は一橋の中学校にてわれよりは二年ほど上級なりし松本丞治君なり。この旧友二人はそのタクリユニ博物館前なる旅館にありし上田先

生のもとにわれを誘ひゆきたり。

あくるとし

翌年（明治四十二年）の春もなほ寒かりし頃かと覚えたりわれは既に国に歸りて父の家いえにありき。上田先生いちにちてつむじはぶたえ一日鉄無地羽二重はおりはかたの羽織博多の帶着流しきながにて突然音づれ来給へりおと。この時のわがよろこびは初めて巴里にて相見し時に優るとも劣らざりけり。なべて洋行中の交際ことわざとしいへば多くは諺ことわざにいふなる旅は道づれのたぐひにて帰国すればそのままに打絶ゆるを。先生のわが身に対する交情こそさるとおりにつべん通一遍とおりにつべんのものにてはなかりしなれ。火鉢を間にしてわれらは互に日本服着たる姿を怪しむ如く顔見合せ今更の如く昨日きのうとなりにし巴里のこと語出でて愁しゅうぜん然ぜんたりき。

明治四十三年はじめの初森上田両先生慶応義塾大学部文学科刷新の事

に参与せらるるやわが身もその驥尾きびに附いして聊いささか為す所あらんと  
 しぬ。事既に十年に近き昔とはなれり。当時はあからさまに言ひ  
 がたき事なきに非あらざりしかど十年一ひとむかし昔の今となりては、いか  
 に慎みなきわが筆とて最早もはわざわいや累を人に及さざるべし。その頃われ  
 は父への手前心はもとより進まねど何処か学校の教師にてもやせ  
 んと思おもいわずら煩あへる折あからなり。ふと第三高等学校仏蘭西語の教師  
 に人を要するやの噂ちらと耳にせしかば早速事を京都なる先生に  
はか謀りしことありき。これに対する先生の返書今偶然これをきようて篋  
い底に見出しぬ。再読するにまのあたり生ける先生の言を聞くが  
 如し。みだり妄みだりにこれを左に録する所以ゆえん感慨全く禁ずべからざるがため  
 なり。

拜啓久しく御無沙汰に打過ぎそうろうだんひら候 段 平に御宥免被下度ごゆうめんくだされたく  
 候しかし毎度新聞雑誌にて面白き御作おさく拝見つかまつ仕りわれら芸術主  
 義の徒とのためかつは徳川の懐かしき趣味のため御奮闘ありが  
 たく奉 感 謝 候、小生事去年の秋よりついつい上京の機  
かんしやたてまつり  
 を得ず帝都の眼覚めざましき活動に遠ざかりて残念至極に候まあま明  
す日は明日はと思ひつつ今こんにち日までに相あいな成候が今月末は是非  
 とも東京へ参り御眼にかかりたく存ぞんじをり候実はただ今直すぐにて  
 も御面会致し親しく懇願 致いたしたき 度 事件 出 来 候が何分意に  
ま任かさず候故手紙にて申上候

昨年御手紙にて当地高等学校仏蘭西語学教師の件御話これあ  
 り候が早速その向むきを探り申候処今年九月よりの事なれば何分

まだ人選等ととうの事は校長にも深く考へをらず従つて御尊父様の御親交ある松井博士まついの紹介あらば自然御就任の事となるべしと考へ小生もあまり騒立てぬ方かへつてよろしからむと控ひかえをり候しかし小生の心の底には別に一種の考ありて貴兄の御入洛らうくを小生自身にとりて非常なる幸福と存ずると共にただ今帝都にて新芸術の華はなばな々々しき活動を試みさせ給ふ貴兄をして教育界の沈滞したる空气中に入れしかも京都の如き不徹底古典趣味の田舎へ移す事は貴兄自身にとりてもわが文学のためにも不得策ふとくさくにはあらざるかとやや心進まざる向もこれあり種々熟考仕候その内段々時日を経てその後の経行なりゆきを觀察仕候処一、二の候補者も出来たれど、どれもまだ確定せず教

授の細目も聞合せ候が仏語の極めて初歩のみを教へる事にて  
おも  
重に当地あるひは東京の仏蘭西法科へ入学する者のための如  
くしたがっ随て狭い田舎の事なれば自然大学の教師なぞよりも幾分か  
注文も出るならむと考へ候かたがた取集めて考へればあまり  
面白き事業とは思へずまたたとへ忍び得る事としても貴兄の  
如き芸術家をかかる刺※の少き田舎に置く事はどうしても口  
惜しい事ならむと確信の度ますます強く相成申候それ故御返  
事を今日まで怠りをり申候この段まことに失礼に候ひしが何  
かもつと華々しき事業をと心掛けついつい今日に相成候然る  
に一月三十一日に至りて急に東京より来信これあり珍らしき  
事を聞込候

この事は非常に秘密に致いたしをり候やうに承うけたまわりをり候が実は今度東京の慶応義塾にてその文学部を大刷新しこれより漸々ようよう文壇において大活動を為なさむとする計画これありそれにつき文学部の中心となる人物を定むる必要を感じ候趣おもむきに候、そこで三田側の諸先輩一同 交詢こうじゆんしゃ社にて大会議を開き森鷗外先生にも内相談ないそうだんありしやうに覚え候が、義塾の専任となりて諸もろもろの画策をする文学家を選び候処夏目漱石なつめそうせき氏か小生をといふ事に相定候由、然るに夏目氏は朝日新聞の關係を絶つ事難かたくして交渉纏まとらずまた森先生より小生に頼むやうにと義塾の人が千駄木せんだぎを訪問したる時、森先生のいはるるには、京都大学の關係上小生の交渉もむづかしからむと申され候由、そこで先

方の言ふには小生のことわりたる時誰がそれならば適當なら  
 むとあるに答へて、森先生は貴兄を推薦なされ候、先方の申  
 すには然らば小生に頼む時いつそ事情を打明けて小生の身みのう  
 上え動きがたき場合には直ちに小生より貴兄へこの事件交渉  
 してもらひたしとの事に御座候、小生は森先生の手紙に対し  
 種々考を述べ置候が要するにただ今京都を去る事は出来兼ね  
 候趣返事おもむきいたし、また貴兄を推薦されし森先生の眼光に服し  
 をる旨申送り候、右やうの次第万事打明け候が貴兄はこの交  
 渉に御応じの御心おこころ如何にや、三田の中心となりて文壇にそ  
 れより御雄飛の御奮発は小生の偏ひとえに懇願する所何卒御快諾の  
 吉報に接したく存をり候もとより御内意を伺ふまでにて事定

らば別に正式の交渉はこれあるべく候

委細の事は御面晤ごめんごの節と存候が小生の聞込みたる処にては、

唯学校を盛にするだけの事ではなくもつと大だいなる運動の序幕

かと存をり候例へば帝国劇場の如きは義塾の側より殆ど自在

に使ひ得られべきやう見受けられ余よは言はずとも種々しゅじゅ面白

き事ありさうに候、芸術家最高の事業はどうしても劇部にあ

りと信ずる小生はこれを聞いて直ただちにモリエールやグリックや

ゲエテ、ワグナーさてはアントワンを思出し何かの形にてこ

の愉快なる事業に助力したく自分でも大おおに心を動かし候なほ

委しくは森先生と御相談あるもよろしかるべきが、以上の成な

行筆紙りゆきにてニユアンスを尽しがたく候がざつと如かくのごとく斯すに

候

条件については決して不満足のないやう致いたすべく、その方は殆どカルト・ブランシュの如き様子に候、これまた御承諾さへ相成らば森先生が万事御おんふく含みのやうに候とにかく芸術のためこの際御快諾の御報ごほうに接するやう祈いのり上候 匆々そうそう

二月五日

上田敏うえだびん

永井荷風様侍史

張目飛耳ちやうもくひじの徒多とき今の文界なれば万事決定まで何分内密に

願上候

悦子えつこよりもよろしく申上候田舎にありて曾遊そうゆうの地を思ひつ

づけをり候ままかつてとまりしホテルの紙を用る候

この書信は維納ウイナの客棧きやくさんホテル・ブリストルの記章を印刷

したる書簡箋にペンにてこまごまと認めしたたられたり文中悦子とある

は令夫人なり。諄じゆんじゆん々としてわが身のことを説き諭さとさるるさま

宛さなら慈母の児を見るが如くならずや。この一書によりてわが三田

に入りし当時の消息もまたおのづから分ぶんめい明なるべし。わが返書

に対し折返して到着したる先生の書次の如し。その全文を掲ぐ。

二月七日の御手紙拜見仕候先は過ます日の唐突なる願事御聞届く被

下候段深く感謝仕候その後森先生とも種々御打合せの御事

と察し申候が何卒折角の壮挙ゆゑ三田の方御助力を懇願仕候

御謙遜の御手紙なりしが決して貴兄ならば成功せざるはずな

しと確信仕候殊に御自身教鞭を執らるるのみならずその上向こ後の発展上一種のPlanを与へ奮心を惹起じやつきする任務は普通

の学究にては出来にくかるべしと思へばこそ貴兄へ懇請仕候ひしかと存候小生は本月末か来月早々上京のつもりに候故その時篤とくと御話申上ぐべく候

京都にては全く話対はなしあいて手なく困却仕候唯宅の者と散歩して食

事でもするより他に致方なく候ただ本年は元日より今日まで

毎日拙作を起草しそれにて紛れまぎをり候この地はとにかく読書

にも創作にも不適當なるるじよあじいの国にて御話になら

ぬ無聊ぶりようの郷さとに候唯この頃はルウイエといふ伊東いとうさんのお嬢

さんを娶めとつた若い海軍士官と往来しこの他にほか先月より二、三

人急に仏蘭西人が加はつてややおもしろく相成候

きのふの御作中 やなぎばし柳 橋 の芸者が新橋しんばしといふ敵国を見る処

おもしろく拝見仕候また先日のもリス・バレスが故郷の白はくよ

楊うの並木をおもふ一節感服仕候当地の平田ひらたとくぼく禿木氏はボオ

・ブラムメルの処を見て英国好えいこくずきの人なれば甚だ嬉しがりを

り候文芸に型や主義は要らず縦横に書きまくるが可よしと考ふ

る小生は貴兄の作さくぶつ物が鳥の歌ふ如く自然に流れでるのを羨

ましく思をり候今後種々の方面へ筆を向けて、あとから追付

かむとする評論家の息をはずませてやり給へと遥かにしよくぼ囑

望 仕候

有楽座にて二十六日はヴィニエツチ氏の音楽と他に『椿姫』

の芝居これあり候由もし上京して間に合はば幸福と存候がち  
とむづかしく候

過日同座にて一度御眼にかかりしのみなれど何卒御尊父様並  
に御母堂へよろしく御鳳ごほうせ声被下度候 匆々

二月十一日朝

上田敏

永井荷風様侍史

かくの如く先生はわが拙作の世に出るいづごとにあるいは書を寄せ  
あるいはわが家やに来給きたまひて激励せられき。『三田文学』第一号漸  
く出でんとするや先生の書簡はますます細事わたに涉りて懇切をきは  
めぬ。

拝啓益々御清適の段 がしたてまつり 奉賀候、その後『三田文学』御経  
 營の事如何いかがに相成候や過日大倉書店番頭原はらより他の事にて二  
 回ほど書面これあり候序ついでに、はじめは談判不調もつとよさの  
 君との間の略式の話について）次にはまた再度貴兄及び塾と  
 談合をはじめたる趣を書添へをり候とにかく雑誌御経営の困  
 難御察申候

これにつき森先生の意見は如何に候や小生の考にては原稿料  
 は多少他よりも高く見積りて置く事必要なるは先日申したる  
 如くに候が何もつぬけて高くするにも及ばずはじめよりあま  
 り多く売らむと計りても無益かと存候、要するに二百頁の雑  
 誌とすれば毎月三百円の総入費あらば事足りむか、自営にす

ればその幾分は確に戻つて来るはず、書肆しよしの方には一年に月数拾円の損として他方に広告機関ともなる利益もあるはずこの条件に近い所にて大倉もうけ合ひさうなものに候がどういふ工合くあいにて謝絶せしやら何はともあれ来月中旬にいづれ雑誌発刊の運はこびと存候つてはほぼ原稿締切期限等御示教被下ごしきようくだされた度候小生も何か一文寄稿いちぶんしたく候

一昨日より家内および娘とともに宇治川に遊んで河沿かわぞいの宿にとまり翌朝奈良へまかりこして新築の奈良ホテルといふに休み、そこより車を雇ひて春日社頭かすがしやとうの鹿をはじめ名所遊覽仕候がホテルの赤旗をつけた車にのつた所はまるでめりけんゆめみの観光団に御座候ひき、夢見ゆめみの里さととも申もうすべき Nara la Morte

にはかりよんの音おとならぬ 梵ぼん鐘しょうの聲あはれに坐そぞいろ古を思は  
 せ候、その時またおもふやう安倍仲麿あべのなかまろがこの小むらさき邑を出  
 でて大陸の支那しかも唐代の支那を見た時、とても帰られな  
 くなりて今歐洲の大都たいとに遊ぶ人の心の如くに日本を呪詛じゆそせし  
 ものと存候このつぎ御来遊のせつは御一所に奈良へ出かけた  
 きものに候妻さいよりよろしく 匆匆

三月二十一日

上田敏

永井荷風様侍史

大正五年われ既に病みてつかれたり。まさに退いて世の交りを  
 断たん事を欲し妓家ぎかしつび櫛あさくさ比する浅草代地あさくさだいちの横よこち町ようにかくれ住む。

たまたま兩國大相撲春場所の初日に当りてあたり何となく色めき  
 立てる正午ひる近くなり。われ銭湯せんとうより手拭さげて帰り来る門口かどぐち  
 京都より東とうじょう上せられし先生の尋ね来らるるに会ひぬ。さては  
 先生の寛容深くわが放蕩無頼を咎とがめたまはざるかと、思へばいよ  
 いよ喜びに堪へず、直に筋すじむこう向なる深川亭ふかがわていにいぎなひしが、  
 何ぞはか図らんこの会飲永劫えいごうの別宴とならんとは。心ゆくばかり半  
 日を語り尽して酒亭を出でしが表通は相撲の打出し間際にて電車  
 の雑沓はなはだ甚しかりければ、しばしが間うちとて再びわが隠家かくれがの二階に  
 請しょうじて初夜過ぐる頃までも語りつづけぬ。わが家の近くには豊とよぎ  
 沢松太郎わまつたろう 竹本播磨太夫たけもとはりまだゆうの住居妓家の間に交まじりてありければに  
 や、女の音ね《ねじめ》には似も寄らぬ正しき太棹ふとざおの響折々漏

れ聞ゆるにぞ談話は江戸俗曲の事また先頃先生のさる書肆しよしより翻刻を依頼せられしといふ『糸竹初心鈔』がことより、やがてはわがその頃の作品の批判に移りて、かかる種類のものにては笠かさもりせん森お仙が一篇詞最もおだやかに想最もやはらかに形また最もととのひしものなるべしと語られけり。

数日の後先生再び京都に赴おもむかんとせらるるや我いかにしけん今までは一度も先生を停車場に送りたる事なかりしを。後あとにて思おもい合あわすれば虫が知らせしなるべし。この夕ゆうべばかりは怪しくも中央停車場に出で行く心起りて、食堂の卓タイプル子に汽車出づる間際まで令夫人令嬢と共に珈琲コーヒーをすすりこの次夏の休みの御上京を待たんと言ひしがそれは全く仇あだなる望にてありけり。

大正五年七月九日先生の訃ふいまだ公おおやけにせられざるに先立ち馬場ばばこ孤蝶ちよう君悲報を二、三の親友に伝ふ。余倉皇そうこうとして車を先生が白しろかねの邸ていに走らするに一片の香煙既に寂寞として霊れいきゆう柩ゆうのほとりに漂へるのみ。われこれを見し時咄嗟とつさの感慨あたかも万巻の図書咸陽かんよう一炬いつきよの烟けむりとなれるが如き思ひに打たれき。わが当代の文化や先生の訃によつてその失ふところ殆ど計り知るべからざる事を思ひたればなり。

大正七年稿



# 青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：米田

2010年9月5日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 書かでもの記

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>